
複写眼は世界を渡る

幻想の箱庭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

複写眼は世界を渡る

【Nコード】

N3609K

【作者名】

幻想の箱庭

【あらすじ】

伝説の勇者の伝説の複写眼アルファ・ステイグマを持った主人公が様々な世界に渡る物語。予定はテイルズオブグレイセスとリリなの、ネギマです。注意、この小説のTOG編は、原作の設定、会話をそのまま使っています。

TOGが終わり、只今ネギマです。

プロローグ（前書き）

駄文かもしれませんがよろしく願っています。

プロローグ

アルファ・ステイグマ

複写眼

複写眼とは、その目で見た魔法をコピーする目のことである。
ある世界に膨大な魔力でこの目を持つ少年がいた。

その世界には魔法、魔術等はなくその少年は、その力に気がつくことも無くそのままただただ普通の人生を送るだけだった。

しかしある老人がその少年のすぐそばに突然現れたことによってその少年の未来が変わった。

老人の名前は「キシユア・ゼルレツチシュバインオーグ」

その世界を渡る力に力を少年は、

複写した。

この物語は魔法、魔術を複写する眼を持つ少年が様々な世界を渡る物語である。

プロローグ（後書き）

宝石の方が主人公の世界に来たのと、世界移動ができるのはスルーして下さい。

第1話（前書き）

ご都合主義満載言葉は普通は通じない、など。そこらへんはスルーして下さい主人公はこれまで二つの世界を移動しています。普通の世界↓オリジナル世界↓Fate↓今回の世界（TOG）文才がないかもかもしれませんがよろしくお願いいたします。

第1話

「ありがとうな」

少年は、その空間にいるもう1人の少女に言った。

「いいわよ、第2魔法の実験に役に立つし」

「はは、相変わらずだな遠坂は」

少年は少女、遠坂に言った。

その時空間に穴ができた。

「じゃあそろそろ行くな」

「ええ。さよならこのことは有効に使わせて貰うわ」

「そうかい。じゃあ、またあえたらいいな。じゃ、またな」

「ええ。またね」

そして少年は世界を去った。その空間に残ったのは少女1人。

「さて、私も研究してあいつにとっとと会いに行きますか。早速今の結果を紙にまとめましょう」

そして少女はもう一度少年に会うために、以前から目指している魔法へ至ることを再度決意した。

- - - - -

「おわああああああ」

さて、まずは自己紹介だ。俺の名前は神弥、衛宮神弥だ。本来は衛宮なんて苗字じゃあなかったんだが、世界を渡る時になんらかのペナルティがあつたみたいで元の苗字を忘れちゃった。しかも着いた場所が周りが地獄みてーだったんで焦ったしなー。おっと、今はそれどころじゃない。俺が叫んでいる理由を教えてやる。つってもだいたいわかっているだろうが。

絶賛落下中です。（笑）

てっ、笑ってる場合じゃねーくそ、遠坂の奴また「うっかり」をやらかしやがったな、。

「ちっ、強化・開始」
トレース・オン

俺はアーチャーからコピーした魔術で体を強化した。

「着地地点は、花畑か？」

そして俺は花畑に墜落した。

「いたたた、ここはどこだ？」

そこは一面花で埋まっていたて海が近くにあり、崖になっていた。

さらに、歌舞伎の花道のようにになっている先には、木が一本立っていた。

「人がいないところで良かった。とりあえず、同調・開始」
トレース・オン

……肉体年齢が七歳になっっているんだけど何故に？世界の修正か？前は三歳くらいだったけど。まあいいか。

さて、とりあえずここから離れるか。てっあれ？誰かいる女の子？十三歳くらいかな？

……おい、はやくこいよヒューバートなんかすごい音がしたぜ。

あ、誰か来たみたいだな、どうしようかね？……隠れておくか？いや、いいか。

来たのは赤い髪の今の自分と同じ位の年齢の少年と青い髪のまた同じ位の少年だ。青い髪の少年が赤い髪の少年のことを「兄さん」と言っていたので兄弟だろう。

「あんた、誰だ？」

「ん？俺か？というか相手に名前を訪ねるにはまず自分からだろう？」

「あ、ああそうだな俺はアスベル・ラントだ。で、こっちが弟のヒューバートだ。」

「（ふむ、この世界は家名が後かなら）」

「俺の名前はシンヤ・エミヤだ」

とりあえずこの世界ふつに名乗ることにするか。しかしなんとなく
語呂悪いな。

これがこの世界の最初の出会いだった。

第1話（後書き）

後書きコーナー

作者（以下作）「始まりましたねー」

神弥（以下神）「ああ、そうだな」

作「ちよつとちよつと、もう少し盛り上げてよ」

神「いや、なんでFate遍書かねんだよ」

作「あ、俺Fateあんま知らないんだよ」

神「おい、じゃあなんで遠坂の伏線作つたんだよ」

作「いやあ世界移動するにはFateの第2魔法が楽なんだよそれに、第2魔法といえば遠坂だろう？」

神「確かにそうだがなんで衛宮？」

作「士郎がいないほうが面白そうだったしアーチャーの士郎がいないと面白い反応しそうだったし」

神「じゃあFate遍書けよ！」

作「無・理」

神「おい」

作「まあまと、そろそろこの辺で」

作・神「さようなら」

第2話

「シンヤはここで何してんだ？」

「いや、それがなんでここにいるのか解らないんだよ」

「え？どういうこと？」

「（まあ、そりゃそうだよなー）と、それよりそこに誰がいるんだけどさ、誰か知らない？」

「……女の子？」

「お、おいどうしてこんなところで寝てるんだよ！？」

ヒューバートが呟き、アスベルが訪ねる。

すると少女が起き上がり、ラント兄弟はビビっていた。

少女は紫色の髪とそれと同色の瞳。髪は長く、ツインテールにしているが、あれでは地面についてしまうだろう。

「……声がした」

「声？」

「わたし、この場所とひとつになって眠っていた」

「（……………妙なことを言う娘だな）」

「そしたらあなたの声がして目が覚めたのなぜあなたはわたしを起こしたの」

「こ、こんな所で寝てたら危ないと思って……」

「（アスベル顔が赤くなってるぞ……）」

「とにかく、寝るなら家に帰ってからの方が……」

しかし少女は、あまりアスベルの話を聞いていないようだ。目の前を横切った蝶をみていて、立ち上がると、蝶を追いかけていった。

「おい、その先は崖だぞ……！」

神弥が叫ぶが、少女は蝶に夢中になっているのか、聞こえていないようだ。

寸前でアスベルが少女の腕を掴み、少女が落ちることはなかった。

「危ない！何やってるんだよ！」

「危ない……？」

「そつだよ。崖から落ちたらどうなると思ってるんだ」

「どうなるの？」

「どつって……えーと……」

「うわぁ」

ヒューバートが崖を覗きこみそんな声を出した。

「下まで結構あるよ。落ちたらけがじゃすまないかも」

「ほら。わかっただろ？もし落ちたら……」

しかし突然アスベルは少女の手を離した。顔が赤いので恥ずかしかったのだろう。

「まあ、詰まるところ落ちたら危ねえから崖に近づくなっつーことたる？」

空気になっていた神弥が言った。

「誰が空気だ！」

「どうしたの？」

「い、いや、なんでもない。ちょっと電波が」

「そう言えば君たちどこの子？この辺じゃ見た事ないけど兄弟？」

「いや兄弟じゃないぞ？そこの子とは初対面だ」

「ふーん。で、お前、名前は？あ、俺はアスベルラントこっちは弟のヒューバート」「よ、よろしく」「あ、俺はシンヤ・エミヤだ」

アスベルは少女に振り返って訪ねた。しかし少女はボーツとしていて答えない。そしてしばらくすると、

「名前……？わたしの……名前……名前……」

「おい、まさか忘れたって言うのか？」

「じゃ、じゃあえつと君はどこから来たの？」

「どこから……？」

少女は周りを見渡しその視線を花に固定して何も答えない。

「ま、まさかそれも覚えてないって言うのか？え、じゃあお前は？」

アスベルは、少女が何も答えないのでそう言い、神弥にもそう質問した。

「あー、それが俺も自分の名前以外何にも覚えてねえんだ」

もちろん嘘である。しかし、異世界から来たと正直に言っても、信じてもらえないだろうし、無駄に混乱させるだけなので、嘘をついた。

「兄さん。この子たちもしかして記憶喪失なんじゃないかな？そういう人って何も思い出せなくなるらしいよ」「記憶喪失……？」

「なあ、お前ら本当に何もわからないのか？」

「名前以外は、な」

神弥はそう返事をし、少女は黙って見返すだけだった。

「ヒューバートの言う通り……かもしれないな」

「ど、どうしよう兄さん」

アスベルがウンウン頷きながら言い、ヒューバートがあわてながら兄に言う。しかしアスベルは何でも無いように、

「街へ連れて帰ろう」

などと言った。

「ええっ！そんな事しちゃって大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないかもだけどこのまま放っておけるもんかそれに街へ連れて行けば何かわかるかもしれないし」

「あ、そうか……そ、それもそうだね」

「なあお前、俺たちと一緒に来いよ。ひとりでここにいても仕方ないだろ」

兄弟が喋っている間、少女はまた蝶を見つけたようで、指先に蝶が止まっていた。アスベルに話しかけられて、蝶が飛んでいってしまう名残惜しそうにしていたが、さらに話しかけられて、アスベルたちに意識が向いて、頷いた。

「お前も来るか？」

「なんかついみたいに言われたな……まあ、確かにここにいても仕方ないしな。わかった俺も連れてってくれ」

「それじゃ街へ戻るとするか」

アスベルが少女のほうに向き直ると、少女は花を見ていた。

「……花が好きなのか？なら、一本持って帰ればいいさ」

そう言つてアスベルは花を抜き、少女に渡そうとするが、少女はすでにアスベルの隣にしゃがんでいた。そして一輪花を抜いた。アスベルはその様子を見て不思議に思つて、

「花がそんなに珍しいのか？お前変わつてるな……さ、行くぞ」

アスベルが歩きだした後、神弥は、花畑でしゃがんで、

「（この世界に初めて来た……あ、いや、墜落したか。記念として持つてくか）」

「……おーい何してるんだ行くぞー」

「（とつ、呼んでる。さて、いくか。この世界ではどんな世界かな？ハハッ）」

この物語の主人公はこの世界の主人公と出会い、どのような影響が
でるのか。それはまだ誰も知らない。

主人公設定（前書き）

間違いがあるかも……………

主人公設定

主人公設定

名前

衛宮（E m i y a）神弥（S i n y a）

容姿

髪の色 黒↓銀

瞳の色 黒↓銀

肌の色 肌色↓白

使える魔法、魔術

投影、強化、解析

炎、水、木、氷、土、闇、光……………などほとんど使える。

捕捉

髪と瞳の色は、元々は黒かったが、エミヤシロウのように投影のしすぎで色素が落ちた。

肌の色は、オリジナル世界で、魔女に呪いをかけられて、白になってしまい、投影をしすぎても色が変わらなかった。

アルファステイグマ
複写眼

発動時は瞳の中央に真紅の五方星が浮かび上がる。この状態の時、魔法、魔術を見ると、その魔法、魔術をコピーする。

好きな言葉

生きてりゃ万事どうにでもなる。

選べ。俺の視界から消え去るか、それともここで朽ち果てるか。

口癖

なんでさ？

主人公設定（後書き）

色々無理があるかもしれませんが、よろしく願います。

第3話（前書き）

次は七年後に飛ぶかもしれませんが

第3話

駄文かもしれませんがよろしく願いいたします。side神弥

さて、花畑から街に来た訳だが……

最初の世界と同じようにモンスターがいたな。俺の敵じゃないが。つか、これからどうすんだ？

「兄さん、これからどうするの？」

「そうだな……」

「あつ！アスベル！」

「げ。シエリアだ」

おお？誰かにアスベルが呼ばれたが……どうした？アスベル。

「アスベルなんで私の事置いてっちゃうのよ！」

お、あの子か。ピンクの髪に茶色の目。気が強そうな子だな。

「兄さんどうしようシエリア怒ってるよ……」

「逃げよう」

「こら逃げるな！今行くからそこにいて！動いちゃだめよ！」

あー少女、確かシエリアか。が走って来た、いや、来ようとしたんだが、なんか途中で息切れして止まっちゃった。

「おい大丈夫か！？」

あ、行っちゃった俺も行くか。

「と、君も来い」

ボーツとしてた女の子をとりあえず引っ張ってシェリアって子によった。

「急に走ったりするからだよ」

「……はあ……はあ……あなたたちあそこへ行っただんじょう」

「あ、あそこって？」

「とぼけないで。裏山にある一年中花ね咲いている場所よ。行く時は私も一緒につてあれほど約束したのに」

「だっってお前を連れて行ったら絶対疲れて歩けなくなるだろ」

あの子は病気が何かか？

「そうになったらどうせ俺がおんぶする事になるんだ」「それで怒るんだよね。『おんぶされるなんて嫌！』って」

「そ、それは……アスベルのおんぶがヘタだから……げほげほっ！」

「言わんこっちゃない。ほら、おぶってやるから。ヘタかもしれないけど我慢しろよな」

「ひ、ひとりで歩けるってば！」

なんか顔が赤いぞ？大丈夫か？

「あれそう言えばあの二人は？」

「ここにいるぜ」

「わっ！？い、いつの間に？」

「最初からここにいる」

「ねえ。この人たち誰？」「花の咲いている場所にいたんで連れて

来たのさ」

「何よそれ……」

まあ、こうなるわな。

シエリアはこちらに近づいて来て少女の事を見てそれから俺の方を見た。

「（私よりもちよつと年上かしら……もしかしてこういう子がアスベルの好み……？……むそれでこっちの男の子は……おじいちゃんみたいな、だけどそれよりきれいな髪してる……）」

なんかシエリアがアスベルを睨み付けてるんだが……どうしたんだ？

「シエリアそんなににらむなよ。」

「……むう。ところでアスベルさっきから手に持ってるのは何？」

なんか不服そうな声をだした後、アスベルが持っている花を見ると、感嘆の声をだした。

「わあ。きれいなお花……！もしかしてこれ、私にくれるつもりで採ってきた……とか……」

「いや、それは……」

（そういう事にしておこうよ。シエリアの機嫌も直るし）

ヒューバートがアスベルになにか耳打ちしてるが……まあ大方都合のいいようにしようとしてるんだろう。

「まあ、そんなところかな」

「アスベルったら……いいわ。この花に免じて今回の事は特別に許してあげるこれ、クロソフィの花ね。こんな季節に咲いているなん

て、やっぱりあの話は本当だったのね」

「ああ。いろんな花がどつさり咲いてたぞ」

「シエリアってば兄さんに花をもらってよほど嬉しいをだね」

「嬉しい……？」

あ、ここに来て名前が無い少女が初めて喋った。
でなんかシエリアに花を渡した。

「え？あなたもくれるの？」

その問いに少女が頷いた。

「あ、ありがとう。あなた、いい人なのね」

「嬉しい……」

なんかへんなやつだな……記憶と一緒に感情まで失ったか？

「ねえ、あなたたちの名前は？どこから来たの？」

「俺はシンヤ・エミヤだ。こっちの子は記憶喪失で名前が解らん。

そう言う俺も名前しか解らんが……」

「街へ連れて来れば何かわかるかもって思ったんだ」「街の様子見て何か思い出す事はある？」

「あーいや、特に何も。君は？」

少女は周りを見渡した後首を傾げた。

「だめか。色々な人に話を聞いたほうがいいかな」

「私のおじいちゃんに聞くのが一番いいと思うわ。街の人の事だったら聞いて知っているはずだから」

「うん、そうだなフレデリックに聞いてみよう。よし。じゃあ俺の家に行こう」

- - - - -
さて、なんか一番大きい家に来たが、この兄弟、ここの領主の息子か？

「お帰りなさいませ、アスベル様。ヒューバート様。」
「ただいま、フレデリック」

「……シエリア姿が見えないと思ったら」

「ごめんなさいおじいちゃん」

「申し訳ありませんアスベル様。アスベル様にご迷惑をかけてわならんとあれ程……」

「迷惑なんかじゃないよ。ところでこの二人かに見覚えはないか？」

「こちらのお二方でございますか？ふむ……残念ながら存じ上げませんが……」

「そりゃそうだ。この世界に来たのは初めてなんだから。」

「おじいちゃんこの人たち記憶喪失なんですって」

「記憶喪失……？それは困りましたな。私どもの方で街の者に聞いてみましょうか？」

「いや、俺たちが行くよ。みんな街へ行ってみようぜ」

「あ、いや、俺はちょっと一人で調べたい事があるから別行動でいいか？」

「ああ。いいけど……調べたい事って？」

「いや、大したことじゃないんだ。だからいいか？」

「うん、いいぜ」

「サンキュ。じゃ」

- - - - -

調べたい事というのは、この世界の魔力の事だ。

気がつかなかったが、この世界には、魔力が無い。その代わりに三種類の何かがある。よく見ていると、全ての人間や、モンスターにもあることから、元素のようなものだろう。この三種類の元素で魔力の変わりになる。問題は、先ほどの花畑には他とは違って三種類全てがあつた。まあ、三種類で全てなのは解らんがな。さて、日が暮れてきたし、一回だけ花畑に行つて見るか。

- - - - -

ヤバい着いたのはいいが、完全に日が暮れちまつた。まあ、いいか。……なんだ？あそこに誰か倒れてんぞ？……無視するか。

ここで寝れば元素を大量に蓄えることができる筈だ。

あの少女もここで寝ていたしな。

あいつらには悪いがもう日が暮れちまつたししゃーねーか。

おやすみ

- - - - -

……ん？話声が聞こえる。なんだ？

「よし。これで俺たちは友達だ！」

「？何やってんだ？アスベル？」

「！？シンヤ！？何でここに？」

「調べたい事があると言っただろう？それで日が暮れちゃったからここにいたんだ。で？そっちの人は？」

アスベルと少女の隣に金髪のなりがいい服を着ている少年がいる。

「こいつはリチャード俺の新しい友達だ」

「ふむ。そうか俺はシンヤ・エミヤだ。よろしくリチャード」

「ああ。よろしく……あ、夜明けだ！」

「……僕は今日の事を、一生忘れ無いだろう」

「……アスベル様！いらっしやいませんか！」

「……リチャード様！リチャード様！」

「呼んでるぞ」

「おいフレデリック！こっちだこっち！」

少女は名前をもらった。少年は友達ということを知った。これからイレギュラーがいる物語はどのように進むのだろうか。

第3話（後書き）

後書きコーナー

作「はい第3話です」

神「……………」

作「どしたよ？」

神「俺また台詞が少ないんだけど、もう少し台詞多くしてくれないか？」

作「あーゲームの台詞そのまま使ってっから、台詞を入れるのが俺の力量じゃ足りないんだよわりわり」

神「おい！だつたらやるなよ！」

作「いやテイルズオブグレイセスの小説が読みたかったんだけどあまりなかったから自分で書いてみようかと…………」

神「だからといって主人公である俺の台詞が少ないのは問題だと思うのだが…………」

作「ま、まあ大丈夫だ、と、思、う……………あ、あのー何で約束された勝利の剣エクスカリバー二本持って構えているの？」

神「ふふふ……………投影っていいよな。王の財宝ゲイト・オブ・パレロンを投影して本物と贋作両方使えるんだから」

作「え、いやちよ」

神「天誅――」

作「あぎゃ――――――」

神「それでは今回はこのへんで」

作「つ、次はげ、ゲストをよぶかも……………くふっ」

第4話（前書き）

全然進まない……（T・T）

第4話

あの後、アスベルはリチャードを連れ出したことはおとがめ無しだったが、裏山に行ったので謹慎となった。

そしてその後すぐにアスベルは王都バロニアに行き、名前の無い少女……ソフィとアスベル達が名付けた。が聖堂の地下で謎のモンスターとの戦闘、アスベルを守ろうとして死亡。ちなみにこの時神弥はこのモンスターの不意打ちを受けて意識が朦朧としていた。アスベルは重症を負った。

ヒューバートは、ストラタの貴族、オズウェル家の養子になり、アスベルがその事に反発。ラントを出て、バロニアの騎士学校に入った。

シエリアはこの事件の後体が突然良くなった。
そして神弥はというと……………

- - - - -

七年後……

side 神弥

この世界に来て七年もたったのか。肉体年齢も14才になった。ちなみに今はストラタの大統領府にいる。昔この大統領に世話になり、たまに依頼を受ける。ヒューバートにもよく会っている。七年で性格がだいぶ変わっていた。

さて、今回も依頼を受けた訳だが……ヒューバートも一緒のようだ。他にも協力者もいるようで、今大統領とその協力者を待ってる。

「失礼します」

お！来たようだ。……ってあれはアスベルじゃないか？

「よ！アスベル七年ぶりだなそれにシエリアに……ソフィ？生きていたのか」

「何でここにいるんだ？ヒューバートにシンヤ」

「ふむ、彼らに大輝石のバルキネスクリアスことを手伝って貰おうと思ってる」

「大統領大輝石のことなんですが……」

「リチャード国王に元素をエレス吸収されたのではないかね？」

「どうしてそれを？」

「ウインドルの大輝石の元素も同じ事になったんだ」

「その事があつて、ラント周辺に駐屯していたウインドル兵が引き上げて行ったんです」

「そこで君達にはフエンデルに行つて大輝石をリチャード国王から守って欲しいのだ。どうかね？頼めるかな？」

「はい。わかりました」

と、色々あつて、俺はアスベルと一緒にフエンデルに行く事になった。

おまけ

「初めましてシンヤ・エミヤです」

「マリク・シザーズだ」

「パスカルだよ！よろしくね！シンヤ」

「はい。よろしく願いしますマリクさんパスカルさん。お二人は今まで何を？」

「ウインドルで騎士学校の教官をしていた。アスベルも俺の教え子だ。」

「色んなところを旅してたよ。君は？」

「俺も旅をしながらこの世界を見て回ってました。ここで大統領から依頼を受けることもありました」

「へ。依頼ってどんな？」

「色々です。地質調査やモンスター討伐などをしています」

「アスベル達とはどんな関係なんだ？」

「七歳ぐらいの時に記憶喪失になってその時に会ったんです。俺は旅に出ましたが」

「なるほど。たいしたものだな」

「いえそれほどでも。それでは俺はそろそろ寝ます。お休みなさい」
「お休み」

……………ある日ある宿屋での出来事。

第4話（後書き）

後書きコーナー

神「……なんだこれ」

作「どうかしたのか？」

神「どうかしたのか？じゃないだろう。全然進んでない上に会話文ばっかじゃないか俺また台詞少ないし」

作「とっとと進ませようと思ってただけ、適当に書いていたらこうなった」

神「適当に書くな！なめてんのか」

作「す、すまない」

神「たくっ次からは気を付けれよ。ところで戦闘描写は何時でるんだ？」

作「まだ決まってない。何時かやる」

神「おい！何時かってなんだよ！？」

作「まだ戦闘描写出す程の自信が無いんだ。文才ないし。それでもやらないと進まないしなー。まあ、お試しで次やって見るよ。それではこの辺で」

作神「さよーなら」

第5話（前書き）

多大なネタバレがあります。TOGをクリアしていない、またはこれからやる予定の人は読まないことをおすすめします。

第5話

俺は今星の核のすぐ近くにいる。ここにはラムダ……この世界エフィネアではなく、別の世界……というより星と言ったほうが正解だが、そこ、フォドラの星の核で発見された生命体、に取り付かれたリチャードがいる。リチャードは、星の核の元素を吸収して自らが星の核になるうとして世界を作り変えようとしていた。……ちなみに七年前に俺達を襲ったモンスターがラムダだった。

「あそこに見えるのか、星の核？」

星の核の前にリチャードがいて、元素を吸収していた。

「アスベル……いい加減にしろ。僕たちの邪魔をするな！」
リチャードとラムダの声がダブって聞こえる。

「よせリチャード！お前はラムダが何をしようとしているかわかっているのか！」

アスベルの叫びにリチャードは薄く笑って、

「当然だろう。ラムダの意志は僕の意志。ラムダの希望は僕の希望だ。もうすぐ僕たちは、この世界そのものになる。僕たちの理想そのものに！こんな汚れた世界……僕たちに優しくない世界など作り変えてしまえばいいんだ。いけっ……！」

リチャード／ラムダが手をふり下ろすど背後から大量の暴星モンスターが現れた。

「ちっアスベル！此方は俺がやるつ。お前等はりチャードのほうに集中しろ！」「シンヤ！……わかった！頼んだぞ！」

「ああ。投影開始さて貴様等いくぞ？仲間の数は充分か？」

俺は干将莫那を投影して、敵の群れに突っ込んで行った。

- - - - -

「さて、まずは一気に敵の数を減らすとするか。王の財宝」

ゲイト・オフ・パピロン

大量の神剣聖剣魔剣が虚空から出現し、敵に突き刺さり、敵の一面が消滅した。

干将莫那で敵に接近し、両断する。

そしてしばらくそのようなことを繰り返したあと、

「大分減ってきたな……そろそろ一気に殲滅するか」

神弥は敵から距離をとり、

「マリクさん、パスカル、シェリア術を借りるぜ！聖剣、其は竜を貫く暗雲を退ける光りとなり、我等に勝利をもたらせ！凍結！此処に降臨し名を示せ。怒りではなく赦ではなく、それは純粹なる真理！凍結！具現せよ、新たな息吹！星よ、降り注ぎ焼きつくせ！凍結開放！発射！」

巨大な竜殺しの剣が現れ、地に突き刺さり、更に王の財宝のように大量の剣が現れるマリクさんの『ドラゴンスレイヤー』、天から全てを浄化する光が敵を蹂躪するシェリアの『ヴァーチュアスレイ』、俺の後ろからソフィ似の人形が現れてミサイルを発射した後、巨大

なレーザー砲を発射するパスカルの『ドリームファンダム』、空から小型の小さな石程度の隕石が落ちて爆発する、前の前の世界での仲間で、星の巫女と呼ばれていたヤツの『スモールメテオ』この四重奏で、殲滅した。

さて、アスベルのほうは終わったかな？

side 神弥end

- - - - -
ソフィはラムダと共に消えようとした。仲間達がうつむいているのを見て、ラムダのほうへ向き、手を伸ばす。しかし、

「やめろ、ソフィ！」

アスベルが前に出て制止した。

「言っただろう。俺は絶対お前を消させない！」

そう言っつて、ラムダに手を伸ば

「まあ、待て。俺がやろう」

そうとして神弥に手を掴まれた。

「シンヤ！？放してくれ！」「待てと言っているだろうがこの阿呆。ホントに昔から変わって無いな。ここは俺がやろう」

そう言っつて神弥はラムダに掴んでいない手を突っ込んだ。

「『『『『『シンヤー!!』』』』』」

「大丈夫だ。今乗っ取られないように解析している……封印は……
難しそうだな。ちよつとラムダと話をしてくる」

そう言つて神弥は意識を手放し、倒れ、仲間達が集まつてきた。

- - - - -

神弥が意識を取り戻すと、無限の武器類が墓地のように突き立っていて、そこに立っている巨大な図書館と協会がある荒野が足下に見え、上にはただ黒しか見えない場所があつた。

「ここは……【無限の武器と知識の終着点】？ああ自分の世界だから固有結界がでたのか。で上がラムダの世界か。ということはここは……」

「お前でもなく我でもない。我とお前が共有する領域」

その時黒い渦のような塊が出てきた。

「我はお前をこの領域から排除してお前の領域を圧迫する。そして……最終的にお前の肉体を我が支配下に置く。器を提供してくれた礼だ。我が意識の底で、この世界が我とひとつになるのを見届けよ。この世界が我と融合し、この世界そのものになる事で、我はようやく完全になれる」

「完全……ねえ」

「そうだ。もう決して、何にも脅かされない。追われ続けた我は、それによりようやく安息を得るのだ。もう……誰にも邪魔はさせぬ」

「あの時俺たちが見たのは、やはりあんた心だつたか」

「……他者の不幸な過去は、さぞ楽しかった事だろう。……満足したか？」

「満足う？んなもんできねーよ。あんなもんカレンでも満足できるか！……あれ？どうなんだろう？まあいいか」

その時某世界で、銀髪のススターがくしゃみをした。

「あんたの過去は確かに悲しみだらけだったさ。だがそれだけじゃねーだろうが。それに」

「自分は乗り越えられた。だからお前も乗り越えられるはず。……そう言いたいのか？人間は強欲で残忍な生き物だなその上傲慢だ。理解するふりをして他を見下しているお前も同じだ。お前の考えなど読んでいるどんな御託を並べようと無駄だ」

「読めている……ねえ。甘いな。誰が何時一人で乗り切れる……等と言った？どんなに個人が強かろーが一人じゃ乗り越えられねーことがあんだ。だがな協力すれば大抵のことができる……俺はそー思っただ」

「協力……？その言葉で騙されるのは愚かな人間という存在だけだ」

「ああ。確かに人間は愚かでしょうもない生物だ。……俺も最近人間というカテゴリーから外れていたと知ったが人間でいるつもりだ。だがテメーも知ってるだろう？人間は決してそんだけじゃねーってよ。テメーはまだ悲しみとほんの少しの楽しみしか知らねーだろう？お前はまだ孤独しか知らないだろう？テメーを育てたコーネルつつう人間はテメーを悲しませる為育てた訳じゃねーだろう？」

「コーネルは……我に生きよと言った。人ではない我……人の形をもたない我に」

「生きるっつーことは何か……それはわからん。俺も自分探しの旅の途中だ終点に答えがあるとも限らない。だがわかることがある。テメーを育てた奴はテメーにこの世界を見せたかったんじねーか？生きてこの世界を知って欲しかったんだろ。テメーは悲しみを知った。だが世界には素晴らしい事が沢山あるコーネルって人が見せたかった世界はそんな世界だと思うぜ」

「……コーネルが見せようとした世界……」

「ラムダ世界を見て回ろうぜ俺と生きる事で」

「……我はお前を浸食する。お前の領域は次第に薄れていくだろう」
「俺は誰にも乗っ取られるなどしねーよ」

「不可能だ。人の身で抗いきれるものではない」

「ひ……と……？人の身……か俺が本当に人という器でいるかどうかテメーで確かめるんだな。俺が乗っ取られるかどうかを」

「……お前はそれでいいねか。我を消せば、全てが終わるものをな
ぜ……」

「あんたを消すとなればソフィも消えちまう。仲間が消えんのは嫌なもんでね。人間にも可能性があることをあんたに見せてやりたいからな。世界は無数にある。だがそこには沢山の人が住んでいるそれを終わらせることがどんな事か一度見てみるよ。それがどんな事かわかるように。ラムダあんたは何も知らない子供だ。一緒に行こうじゃないか」

「……断ると言ったら？」

「……無理やりでも連れてってやるさ」

「あくまで我と共に生きるつもりか。油断していると、お前の脆弱な自我など簡単に乗っ取ってしまうぞ」

「ふんっ俺はもう自分の中にめんどろなものを飼ってるんでね……いまさら増えようと一緒だ」

「……これからはお前と我と二人だけの戦いになるという事か」
「さあこれからどうなるかなんてことは解らない。だが負けるつもりもない」

「……少し長く話し過ぎたようだ。それとも……もう限界が近いのか……シンヤ……我は少し……眠らせてもらっぞ」

声がだんだん小さくなっていく……

「待て、ラムダ、眠るのならば早く起きてこいよ。この世界や外の世界を見せてやるから……消えるなよ。生きるんだ、ラムダ」

……

「う……」

「シンヤ！」

神弥がうめき目を開けた。その目は左目が色が変わっていて真っ赤になっていた。

「シンヤ、大丈夫か？」

「二人が話してるのあたしたちにも聞こえてたよ。ラムダは……消えちゃったの？」

突然ソフィが神弥の手を取った。目を摘むって集中しているように見える。

「……違う。今までみたいな反応じゃないの」

「それじゃ……ラムダは消えたの？」

ソフィは首を傾げた。

「これは……それとは違う気がする。このラムダは……消せない。消す必要がないラムダ……」

「どういう事なのだろうな？」

「ラムダは……眠ると言っていた。少し眠らせてもらおうと」

「じゃあもうソフィが自分を犠牲にする必要はなくなっただって事？」

それに首肯で返す神弥。

仲間達は安心した様子を見せる。

神弥は立ち上がった。

それに続き皆が立ち上がる。

「さてと！戻るとするか。俺たちの帰る場所へ」

「……………ええ（ああ）（うん）！……………」

「（見ていな、ラムダ。まだしばらくこの世界を回ろうと思っっているからな）」

物語はエンディングを迎えた。世界を渡る少年は、今しばらくこの世界に残り、世界を見て回ることにした。新たな仲間の約束の為に。

第5話（後書き）

あとがきコゝナ

作「終わった」

神「飛ばしすぎじゃないのか!？」

作「まあねーTOGは練習の為に書いたようなものだから、早くリカルかネギまに行きたかったから超特急で進めて見ました」

神「読んでいる人いるのかわからないけどキャラがわからないまま終わったんだけど大丈夫か？」

作「うーん。どうだろう？まあ知りたい人はTOGをやれば良いと思う」

神「無責任な……で、次はどこにいくんだ？」

作「読んでは未定だ。実は俺、両方原作あまり知らないんだよね」

神「じゃあ何故に!？……成る程、今人気だからそれに乗っかろうとしてんのか」

作「うつ、い、いや、前から二次制作の小説を見て書いてみたいと思っていたんだ。他の方のを見て参考にしながら」

神「怒られるぞ!」

作「覚悟の上です。パクリはしないから大丈夫かなーと思いまして」

神「ま、怒られるのはお前だからいいけどよ……それと俺性格変わってないか？最初はこんなキャラの予定じゃなかっただろう？」

作「じ、次回は番外編を予定しています。その時にはどちらに行くか決めますのでよろしくお願いいたします。それでは！」

神「逃げるな！！」

主人公設定 & a m p 雑談会（前書き）

最後にお願ひがあります。

主人公設定& a m p・雑談会

「作者の部屋」

神「掃除しろ」

作「いきなり！？確かに散らかっているけどさ」

神「そう思うなら最初からやれよ。で、後書きじゃないのになんでこんなところに呼んだんだ？」

作「新しく設定が加わったからもう一度主人公の能力紹介をしようかと思いつきまして……」

神「なるなる。流石行き当たりバッタリで書いていることだけはあ
る。まさか思いつきでやるなんて……やるじゃねーか」

作「誉めてるのが貶しているのか解ら「貶してんに決まってんじや
んか」謝れ！俺と同じような書き方してる人に謝れ！」

神「■■■■（作者の本名）意外の作者の方々本当にすみませんで
した」

作「本名出してんじゃねえよおおおおおお！！伏せたから大
丈夫だろうけど……で、では主人公の設定です」

名前

衛宮神弥 えみや しんや

真名

神凧森羅 かんなぎ しんら

容姿

目

右目が銀で、左目が真紅。

髪

衛宮士郎と似た髪型で、色は銀色。

肌の色

白（呪い。最初に移動した世界で、病弱な呪式使いが、「健康的な肌の色は見ているだけでム力つく」と、一方的に掛けた呪い。

掛けられたその場で術者を殺したが、「ふ……………これで、貴様も……………」等と、意味深な言葉を残したが、肌が白くなるだけだった。今は褐色の肌になりたくないなので、解呪する気はない）

神「おい。長々と書いているが、普通に呪いで白くなったでいいんじゃないのか？つーか補足が長すぎて、一番重要な白ってところより目立ってんじゃないか！」

作「フツ書いている途中に裏設定が次々浮かんでくるものだから……………書いて見たぜ……………」

神「いや、浮かんだからってこんなに書くなよ。もっと簡潔に書け」

作「やっちゃんたぜ！」

神「やっちゃんたぜじゃねーよ！と言つかこのネタ解る方いるのか？」

作「さあ？まあいいから。次々いこー！」

最近型月系の吸血鬼真祖だと判明した。吸血衝動はなかった。顔は最初の方は頼り無さそうだったが旅を続けて貫禄が出てきた。結構なイケメン。

作「イケメンなんて死んじまえばいいのに……」

使える能力

アルファ・ステイグマ
複写眼

魔法、魔術等をコピーする能力。

発動時は、瞳の中央に五方星が浮かび上がる。

暴走状態には、真祖の吸血鬼なので、吸血衝動が起こるだけですむ。

不老不死

不死殺しを使わない限り死なない。

魔力

世界から供給されているので無限。

吸血

吸血をすると、された人間は死亡。死徒になる。

固有結界【無限の武器と知識の終着点】

衛宮士郎の固有結界に図書館と、銃等の現代武器が加わった物。

図書館には、コピーした魔法、魔術等が保管されている。

発動時には、炎の境界線が出来る。また、森羅（神弥）のオリジナル魔法で、宝具の英雄を召喚、受肉させることが出来る。

図書館は内部から大量の本が出てきて敵と判断した者を記録されている魔法で排除を行う。

天才

先天的な能力。大抵のことは一流以上になれる。例は衛宮士郎は物干し竿を投影しても、燕返しは出来なかったが、森羅（神弥）は少しの努力で出来る。

神「……チート過ぎないか？」

作「奇遇だな。俺もそう思った」

神「あんたが設定したんだろうが！」

作「いやー自分でもここまでするつもりは無かったんだけどね、思いつきで書いたからこうなった」

神「……後で矛盾がでるぞ？」

作「覚悟の上だ！……でも面倒な事になりそうだなあ……でも書き直すのも面倒だしなあ……」

神「もういい。先刻言った通り知らんからな……んで、魔法少女リカルなのはと魔法先生ネギま！どっちに行くんだ？」

作「うーん……ネギまならエヴァが吸血鬼になるあたりになるし、リリなのなら無印からで反管理局だし……どっちがいいと思う？」

神「テメーで考えろや！」

作「じゃあネギまにするかな〜でもまだ迷っているからな〜」

神「……なら読者の方々に決めてもらえばいいんじゃないか?」

作「読んでいる人いるのかな?」

神「さあ?来なかったらネギまにすればいいだろ。どうせこの小説自己満足なんだし」

作「それもそうだな。では皆様3月27日午前8時までどちらに行くかを投票して下さい。お願いします!」

神「来るといいがな」

作「ああ。それでは今回はこの辺で、」

神「こんな下手作者が書いた雑談を読んで下さって、」

作・神「ありがとうございました!」

作「……下手は酷いじゃないか」

神「事実ではないかね?」

作「こんな時だけアーチャーの真似すんな!」

ネギま編プロローグ（前書き）

更新が遅れてしまつて申し訳ありません。
藤村紫炎様ありがとうございました。

ネギま編プロローグ

どうも衛宮神弥えみや しんやです。えー只今世界を渡ったばかりなんだが……

周りは木、木、木……はい。森の中で迷子です。

し、仕方ないだろう！座標指定を間違っただから。くっ、あんなところでうっかりするとは……まあいつかあ。

別に目的がある旅をしている訳じゃないしなあ。……世界を気ままに旅してんのなんて俺やゼルレッチのじいさんくらいだろうーなあ
――キヤアアアアアア

……誰かの悲鳴？ここから2、30キロ離れてるな。相も変わらず吸血鬼のスペックは高いな。距離の大体もわかつちまう。面倒だなあ。

……行くとするか。一応、衛宮の性を名乗っているんだから。悲鳴を聴いちまったんだ。助けに行くのが正義の味方だろう？

――

全力疾走……なんてしたら大変な事になるからセーブして中世の城のようなところに来た。……中から血の臭いと同族の匂いがする。真祖と死徒を比べるのはそもそも間違いないんだが、ここは世界が違うから慎重に行くですっかあ。

緊張感がねえだとお？いいんだよ。死なないし。ああ？さっきと言

つてることが違う？いいつつてんだろぅが！ミンチにすつぞ！

- - - - -

城内は人の気配がしない。で、しばらく歩き回って広い空間のがある広場にでた。

そこには何かの儀式場の跡があつた。複写眼で視たが、この儀式場、吸血鬼になる為の魔方阵等がある。

……遠坂のいた世界と同じような世界かと思つたが、術式が根本的に違うから、違うだろう。

術者が爪のようなもので貫かれて死んでいるから、誰か他人を吸血鬼にして殺されたんだろぅ。自業自得か、裏切られたか……ま、どつちでもいいんだが。

んじゃ新たな同族に会いに行くか。そんなに離れてはいないようだ。

- - - - -

しばらく進んだところにまだ幼いと言つていいよう……少女がいた。此方に驚いた様に振り返つたから気付いた様だ。

「だ、誰？私を殺しに来たの？」

このよう……少女はまだ俺が同族とは気付いてはない様だ。

「違う違う。ただ同族の気配がしたから来てみただけだよ」

「同……族？……っ！！」

「おう。わかったか？因みに俺の名前は神弥・衛宮だ。好きに呼ぶといい。君の名前は？」

「……エヴァンジェリン。エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルです。好きに呼んで下さい」

「じゃあエヴァ。君は吸血鬼になった訳だがこれからどうするんだい？」

「どう……する……どう……しよう」

「どこにも行くところがないなら……俺と一緒に来ないか？ここで会ったのも何かの縁だ」

「……わかりました。私を連れてって下さい」

「ああ。敬語も止めていいぜ」

「うん。わかった。シンヤって呼ぶね？」

「おう。じゃ、エヴァ」

「なに？わっ」

俺はエヴァを抱きしめてやった。

「泣いて、いいんだ。泣きたい時は泣いていいんだよ」

「う、うわああああああああ怖かった。ごわがったよおお」

エヴァはその後しばらく泣いていた。

その世界の幼い真祖の吸血鬼と、別世界の旅する真祖の吸血鬼はこうして出会った。

この世界の物語はここから始まる。

ネギま編プロローグ（後書き）

後書きこゝな

作「始まりましたネギま編。藤村様ありがとうございます」

神「ありがとうございます。で？作者覚悟はできているのか？」

作「か、覚悟？なんで？」

神「なんで？じゃねえよ！更新が遅れたことだよ！28日には書くんじゃないかったんかあ！」

作「あー、えーと、そのーすんまつせんしたー」

神「よし。歯あ食い縛れえ！」

バキッ

作「ギヤアアアアアア折れたアアア歯が折れたアアア」

神「大丈夫だ。そのうち生えてくるさ。たぶん」

作「おいイイイイたぶんってなんだたぶんって」

神「？おそろくつー意味だが？そんな事も知らんのか？やっぱ駄目だな■■■」

作「前回に引き続きだアアア！本名を使うんじゃないエエ！」

神「わーたよ善処するぜ ■ ■」

作「いきなり破ったじゃねえか「ウザイ」へぶっ」

神「ウザイ作者は気絶したのでこのへんで終了します。それからネギま偏後書きの終わりのときの決め言葉を応募します。なにかいい案がある人は感想で。お願いします。さよなら」

第1話 魔法使いと修行と故郷（前書き）

2日跨いで書いたので、前半と後半が繋がらないかも知れません。

第1話 魔法使いと修行と故郷

「エヴァ、まずは旅をする前に修行すつぞ」

「？なんですぐに旅に出ないで修行するの？」

「理由は二つある。」

「いいか？エヴァ。俺達は吸血鬼だ。大抵の吸血鬼は太陽や冷水に弱い。だからその弱点を克服するのが一つ目の理由だ。」

「二つ目の理由は「貴様等！吸血鬼だな！？正義の名の使者が排除してくれる！」……こういうことだ。吸血鬼は人間達には敵になるから自分で自分の身を護れなきゃならねえ」

「人間の、敵……」

「貴様等！無視をするな！『魔法の矢』！」

正義の使者とやらが俺達に攻撃を仕掛けてきた。それを俺はコピーして同じ魔法をぶつけて相殺する。

「いいかエヴァ。俺が今から戦い方を教えてやる。生き残る為にやあお前は強くならなくちゃならねえ」

「うん！わかった！」

「よし。じゃ、俺はあいつ等と遊んでくる。よく見てろよ」

そう言ってさつきから攻撃を仕掛け続けている魔法使い達を見る。

俺は人間の動体視力では捉えられない速さで魔法使いを力任せに肉薄する。

そうしたら、攻撃された魔法使いは、どぱあという音と共に弾け飛んだ。

「う、うわあああああ」

他の魔法使いは錯乱して逃げ出すが、回り込んで先程の奴と同じ結果にする。

周りは人間の肉塊と大量の血が飛び散っていた

普通の人間が見たら盛大に吐くような光景だが、エヴァは吐きそうになりながらも、必死にこらえていた。

「エヴァ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫、だよ……」

「そうか。だが、わかっただろう？ 吸血鬼は人間にとって、化け物だと。」

だからあの様に殺そうとしてくる。だから死なないように修行をするんだ」

「うん！ わかった……ごめんなさい」

「なんで謝るんだ？」

エヴァは暗い顔をしていた。

「だって、私がいなければこんな事しなくてもよかったんでしょ？」

そんな事を言ったエヴァに少々面食らう。

「ばーか。いいんだよんなこたあ。俺が好きでやってんだ。気にすんじゃないよ。」

それに、放つとけなかったんだよ。あと、ごめんじゃなくてごういうときゃあ『ありがとう』っーんだよ」

「わかった！ ありがとうシンヤ！」

エヴァは満面の笑みでそう言った。それを見て、ああ。助けてよかったなと思えた。……………俺はロリコンじゃないぞ！

- - - - -

「行くぞ森羅！『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊
500柱！魔法の射手、連弾・闇の500矢！！』」

「『ロク・ラク・ナ・レック・ラグナロク、光の精霊500柱！魔
法の射手、連弾・光の500矢！！』」

ドドドオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「腕を上げたなエヴァ！『ロク・ラク・ナ・レック・ラグナロク、
来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐・雷の暴風！
！』」

「あたりまえだろう！お前と二百年も修行していたのだからな！『
リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精！！闇
を従え吹雪け常夜の氷雪・闇の吹雪！！』」

ずどどオオオオオオオオオオ！！！！

「よし。エヴァ、ここまでですんぞ。」

「ハアハア……わかった」

エヴァと出会って二百年程たった。

その間、多数の魔法使いが攻めて来たが、返り討ちにしていた。

エヴァの口調も変わって高圧的になった。たまに元に戻るが……

んでその内賞金と二つ名が掛けられていた。

俺は600万\$で、二つ名が『不死の王』、『全ての武器／魔法の所有者にして担い手』、『複写の魔法使い』、『この世全ての悪』なんてあの泥の聖杯と同じ名前がついちまった。

他にも、『世界の敵』、『世界との戦争する者』等々

……色々言われているが、世界と戦争なぞするきはねーし、真祖だから逆なんだがなあ。

エヴァは250万\$の賞金が掛かり、二つ名は、『闇の福音』、『不死の魔法使い』などがつけられた。

因みに、二人で『永遠の恋人』、『最悪の吸血鬼共』と言われた。

『永遠の恋人』と言われた時に何故かエヴァが顔を赤くして嬉しそうにしてたが……

そんなこんなで、二百年の間修行ばかりしてきた訳だが、そろそろ旅に出ようと思う。

「エヴァ、そろそろ修行も充分したんで旅に出ようと思うんだが、どうする？」

「旅……？ああそつか。そういえばそんな事言ってたな。もちろん構わんぞ」

「よし。じゃ、まずは何処に行く？」

「ん〜そうだな……では森羅の故郷の日本に行って観たいな」
「そうか。日本の観光地と言やあ……そうだ、京都に行こう」

なんだよ、一度言ってみたかったんだよ。

「京都か……ま、まあ、森羅が行きたい場所ならどこでもいいんだがな」

………ん？なんか凄い事言わなかったか？
……ま、いつか。

「んじゃ、早速行くとすつか」

「うん！……じゃなかった、うむ。だがどうやって行くのだ？」

「そうだな………ま、歩いて行くか。海は船でな」

「？認識障害魔法使って飛んで行くのだと思っていたのだが、違うのか？その方が速いだろ？」

わかって無いなエヴァ。ま、修行ばっかしてたからだからかな。今回の旅の目的はこいつとラムダにこの世界を見せたかったからだ。ラムダはまだ起きてない。そろそろ強制的に起こすかな？

「そりゃそうだ。でも、旅は己の足で………その方が楽しいだろうしな」

「ふむ、それもそうか。出発はいつ頃にするのだ？」

「荷物纏めたらすぐだ。とつっても王の財宝に入れるだけだがな……この世界は投影でほぼ同じものが複製出来るから最近はただの倉庫になっちまつてるが……」

「あ、あははは………と、とりあえず準備してくる。」

そう言つてエヴァは走つて行つた。俺も早く準備すつか。

- - - - -

数年後……

俺達はやつと京都に着いた。途中、エヴァが人形に興味を持ち、人形を作つた。

名前はチャチャゼロ。殺戮人形だ。何故か片言で喋る。

二つ名も新たに『人形使い』が加わつた。

「おつと、そうだ！観光した後神鳴流つていう剣術を習いたいから暫く此処にいてもいいか？」

「ああ。ではその間私は暇になるな……まあ、何か暇潰しになる物を見つけとるから、気にしないでいいぞ。本当に気にするなよ！」

「なにもそんなに強調して言わなくてもいいんじゃないか？」

「うっ」

「ケケッコリヤ大変ダナ御主人」

「だっ、黙れボケ人形が！！」

チャチャゼロがエヴァを怒らせ……なんでエヴァが怒つたのかわからんが……エヴァがキレてチャチャゼロを投げつけるが、チャチャゼロは見事に着地し、俺の後頭部にしがみついてきた。

「~~~~！貴様あ！神弥から離れる！！神弥も黙つて無いで何か言え！」

「いや、別にいつもの事だからなあ」

「ケケケッソウイウ事ダ御主人」

「なっ！いい、いつもの事だとお！？（……わ、私でもそんな事恥ずかしくて出来ないのにい……いいなあチャチャゼロ）」

エヴァが突然顔を赤くして身悶え始めた。

「どうした？エヴァ？」

「な、なんでもないよ！うんなんでない」

「それならいいんだが……口調が元に戻ってんぞ」

「ケケケツ可愛ラシイ喋り方だな御主人」

「／／／うつ、うるさい！！さっさと行くぞ！！」

あ、またキレた。

違う世界だが同じ名前の故郷、日本。日本に来た神弥は神鳴流をマスターすることが出来るのか？それは次回にて！

第1話 魔法使いと修行と故郷（後書き）

後書きコーナーは次の話しで。

作・神『ゴールデンビクトリー』（前書き）

テイルズオブグレイセスのキャラのキャラ崩壊が起きますので、その様なことが嫌いな方は戻るを押してお戻り下さい。

作・神『ゴールデンビクトリー』

作「はい。始めました。『ゴールデンビクトリー』。実際は後書きコーナーだったのですが、予想以上に長くなってしまったのでこちらにうつしました。司会は私、作者の幻想の箱庭と、」

神「この小説の主人公、衛宮神弥です。だが作者あ『ゴールデンビクトリー』ってなんだ？」

作「（おい。一応今は司会なんだから敬語で話せ。……）『ゴールデンビクトリー』とは、私が好きなゲーム、ティルズオブザワールドレディアントマイソロジー2に出てくる隠し要素と予約特典の事です。因みに、ゲームの司会はゼロスさんとジエイドさんでした」

神「なに？じゃあパクったのか？大丈夫なのか？そんな事して？」

作「（だから敬語！）……そこところは解りませんが、大丈夫でしょう。宣伝しましたし」

神「（ちっしかたない）本当に大丈夫ですかねえ……まあ、いいでしょう怒られるのは貴方ですし」

作「うつ、また同じ事を……ごほん。えーこの『ゴールデンビクトリー』では、ゲストをお呼びしての対談です。ゲストを呼ぶのでこのような形になりました」

神「成る程」では今回のゲストはどなたなんですか？」

作「はい。今回のゲストはこれの方です。どうぞ！」

アスベル（以下ア）「どうもアスベル・ラントです。テイルズオブグレイセスより出ました」

作「はい。お二人にお越しいただきました。アスベルさん貴方はゲストなので普通の喋り方をして下さい」

ア「わかった」

作「それでは質問です。神弥が貴方が主人公の作品、テイルズオブグレイセスに介入して、どんなところが変わりましたか？」

ア「大まかな流れは変わってないが、クライマックスが一番変わったかな？俺がラムダと対話するところを神弥がやったんだよ。会話は俺の時とあまり変わらないけど」

神「……作者？」

作「し、しかたないだろう！文才なんて俺にはないし、練習のようなものだったんだから」

神「おい。……まあそれは後々追求するとして、アスベルに二つ目の質問です。この小説について、不満はありますか？」

ア「不満？……ふふふっ」

神「？アスベル？」

ア「大有りだ！いくら練習の為にやったのだとして、ネギまのこ

の扱いの差はなんだ！？ネギまはプロローグ、第1話としかやっていないのに、大分細かい！なのに俺達の方はおおざっぱすぎるだろ！やり直しを要求する！」

作「あ、いや、その、スミマセンでした（土下座）じ、実はぶつちやけると、テイルズオブグレイセスは発売してからまだあまりたっていないので知らない人が多いのと思って早急に終わらせたんです本当にすみませんでしたー」

神「まったく、貴様は本当に駄目だな。濁点を取ると発売禁止になりそうな漫画に出てくるグラサンかけた奴と同じあだ名にしてやるか？」

作「俺はまだオッサンじゃない！………兎に角、テイルズオブグレイセスについては、リリカルが終わった後に読者の方々に聞いてやるかどうかを決めます」

ア「読者の方々、お願いします！！まだ出番がほとんど無いんです！！！」

作「必死だな……」

ア「そりゃそうだよ！誰のせいだと思っているんだ！」

作「え？俺？」

ア「（ブチッ）ぶつ飛ばす！遠慮はしない！決めてやる！斬空刃！
無塵衝！！！」

作「え？ちよつ、待つ………あぎゃあああああ」

神「えー、作者が飛んで行ってしまったので変わりにお詫びを……」
『ゴールデンビクトリー』は原案のものからキャラ崩壊が多かったの
でキャラ崩壊をアスベル・ラントに起こりました。アスベルはこの
ようなことはありません。不快感を催した方本当に申し訳ありません
でした。それから、この『ゴールデンビクトリー』をまだ読みたい
と思った方は感想をお願いします。ゲストへの質問、キャラ崩壊を
起こすかどうかのアンケートもしますのでよろしくお願いいたしま
す。ではこの辺で、さようなら」

作・神『ゴールデンビクトリー』（後書き）

またやる場合の次のゲストはエヴァンジェリンさんです。

PV5万アクセス&ユニーク1万突破記念

作「今回はPV5万アクセス&ユニーク1万突破記念と、言うわけで特別編です。こんな駄文を読んで下さいますて本当にありがとうございます。」

神「ありがとうございます。良かったなあ作者。ここまで書いてきた甲斐があつたうちゅー訳だ」

作「いや本当に。」

神「でも昨日のうちに突破してんだから昨日書いた方が良かったんじゃないか？」

作「昨日書きたかつただけど……………眠っちゃった」

神「っじゃないだろうが！」

作「すみませんでした。って言い訳くらいさせて下さい。実は一昨日この小説を調子に乗って書いてたから寝てないんですよ！そして午後6時にはいつの間にか寝てたから晩御飯、食べて無いんですよ」

神「…………さっきからどうした？敬語ばかり使って…………」

作「起きたばかりなのでテンションが変な方向にベクトル変化してるんです…………だから神弥の喋り方も多少変になっているかもしれない…………」

神「そんな状態で書くなよ！」

作「無理です。先程から変なテンションだから関係ないけど本編に繋げれそうなアイデアが沸いてくるのです。という訳で、雑談はこの辺にして『ネギま編はやらないけど、新しいオリキャラ出すための伏線編』始まりまーす」

神「長いわ！まあいい。じゃ、どうぞ」

- - - - -

(side???)

……初めまして私は神乃美佳弥^{かみの みかや}です。……誰に自己紹介しているのでしょうか？

まあ、それはともかく大変なんです。

最近、私の幼なじみの神凧森羅が行方不明なんです。（主人公のことです。詳しくは主人公設定&雑談会をお読みください）

……何か電波来たけど、いいです。それで私はいてもたってもいられなくて探していたのですが……

大型トラックに跳ねられました。

で、恐らく即死だったのでしょう。そして現在周りが真っ白のところに居ます。

……ここは恐らくテンプレ通り神様が居ると思つのですが……

「うむ。よくわかったな」

……本当にいました。白髭のお爺さんです。

最近は幼女も流行っていますが、完無欠にお爺さんでした。

「何か文句でもあるのかの？」

いえいえ滅相もない。やはりテンプレ通り人の心をよむのですか……

「まあ。本題に入るぞい。実はお主が死んだのは儂が意図的にやったことなのじゃ」

……何の為に？まさかと思いますが、暇潰しじゃないですよ？

「必要があつてのことじゃ。お主にやって欲しいことがあつての」

一応聞いておきましょう。どちらにしても拒否権は無いんでしょう？

「うむ。やって欲しい事は1つじゃ。最近転生者が増えているので困っているのだ。」

そこでお主には転生者を駆逐して欲しいのだ。

その転生者を殺すかどうかはお主に任せよう」

私も転生者になるのでは？

そうなると本末転倒ですよ？

「大丈夫じゃ。お主は正確には転生者では無いからのう。」

さて、お主にはデフォとして不老不死が備わっている他に願いを幾

つか叶えやろう。

そうじゃな…… 3個程叶えてやろう」

じゃあ1つ目は魔法を作って使えるようにして。

二つ目は膨大な魔力。

ここまでいい？

「大丈夫じゃ。但し、魔法を作るのは少し制限させてもらうがのう」

……わかった。それでいい。

「それで、三つ目はなんじゃ？」

三つ目は…… 森羅に合わせて。

「……ふむ。わかった。本当にそれでいいのじゃな？」

いい。早くして。

「わかっておる。じゃ、頼んだぞい」

それを聞くと、私の意識は途絶えた。

(side 神様?)

「行ったか」

後ろから声がした。

「しかし世界はどうしたいのだろうな？ 奴の幼なじみまで送ってま
で、世界の邪魔になるものを消したいのかね？ あなたはどう思うか
ね？」

「さあ。そこまではわからぬよ。エミヤシロウ」

「おっと。あまり人の真名を言わないで欲しいのだがね。しかし私
意外の者が衛宮のところは奴のいた世界だけだからな。どう動くの
が見ものだと思うがね」

本当に世界というのは腐っているのう。おっとよびだしが来た。こ
れで失礼する。

end

- - - - -

作「はい。終了です。」

神「なあ、本当にアイツを出すのか？」

作「さあ？そこまでは決めてない所詮は思いつきだもの。と、言う
わけですすかもしれないけど出さないかも知れませんが俺の気分次第
だな」

神「おい」

作「それではこの辺で。

皆さんいままで見てくださってありがとうございます。これからも
よろしく願います。

さようならー」

第2話 別行動と仮契約（前書き）

更新遅れてすみませんでした

第2話 別行動と仮契約

い、意外と神鳴流を取得するのは大変だった。

アスベルの剣術に組み込ませて使えるようにしたから時間がかかった。

まさか一年間も修行することになるとは思わなかったぜ……

エヴァも合気道を習っていたようだからだいぶ強くなったと思う。じゃ、そろそろ日本から出つか？

「なあエヴァ、そろそろ日本から出ようと思うんだが次は何処に行く？」

「む？別にいいのだが日本は森羅の故郷だろ？もう出るのか？」

そついやあ俺の故郷だったな。此処（日本）。

「ま、故郷つつても後三百年くらい先の話だからなあ別にいいかなあと思つて、な。それともまだ日本にいたいかな？」

「別にいいと言っただろう。では何処に行くのだ？」

「どうすつかな……そーだ。こーゆーのはどうだ？三百年くらいの間別行動するつてのは？よし、これいい。これ採用。」

「ちょ、ちよつとまで！何勝手に決めてるんだ！さ、三百年間も、会えない、の？」

あ、なんかエヴァが泣きそうになってきた。

「あー、そうだな。んじゃ、その三百年の間に俺を見つけてみな。」

そーしたらそこからまた一緒に旅をしようぜ。」

「……別行動をしないのは駄目なの？」

「さっき言っただろう？決めたつてよ。」

「……うん、わかった。森羅は一度決めたら止まらないもんね。」

「……何か馬鹿にされた気がするがまあいい。」

さて、これから暫く会えなくなるんで、して欲しいことはあるか？

「え、えっと、じゃあ」

答えにくいのか、もじもじして顔を真っ赤にしている。

「わ、私とパ、バクティオー仮契約して！」

「バクティオー仮契約？してなかったっけ？」

「うん。そ、それで……いい？」

バクティオー
仮契約か……

「いいぜ。じゃ、とつとしよう。どっちが主になるんだ？」マスター

「あ、えっと、二人ともにしようよ。」

ふむ……主であり、マスター従者でもあるか……

何か聖杯戦争を思い出すなあ……凜や桜、イリヤは元気だろうか？
ん？そっぴやあこの世界で英霊は呼び出せるんだろうか？

「あの……駄目？」

おっと、少し考えすぎてたようだ。後で考えよう。

「駄目じゃねーよ。んじゃ、始めるか。」

そう言ってから、床に魔方陣を描いていく。

ちなみに、今いるところは拠点にしている家で結構広く、地下がある二階建ての家だ。

明日にはこの家には人形を住まわせる。

認識障害の結界を張るから、近所の人間も不思議に思わないだろう。

うし。できた。

「じゃ、やるぞ?」

「う、うん。」

そう言い、エヴァは目をつむった。

少し緊張してきたな……とつくの昔にこんな感情無くなっちまった
と思ってたんだがまだ残ってたとは…………

「よ、よし。終わったぞ。」

「う、うん。」

俺は少し顔が赤くなっている。エヴァはもう茹で蛸みたいになっているが。

「うし。じゃ、俺は行くは。」

「わかった。絶対すぐに見つけるからね!」

「わかったわかった。」

ああエヴァ、口調、また戻ってんぜ」

「え?……あ。」

「じゃあな、キティ。」

「な、こんな時だけその名で呼ばないで!」

照れ隠しに無詠唱の魔法の射手が来るが、かわしてそのまま転移した。

第2話 別行動と仮契約（後書き）

後書きコーナーはお休みです。本当にすみませんでした

第3話 世界の敵と紅き翼（前書き）

今日は高校の入学式……疲れました。

春休みが終わってますます更新が遅れそうです……すみません。

第3話 世界の敵と紅き翼

元は何かの建物が炎に包まれて燃えている。
そこに一組の男女がいた。

「ちッ、ここもハズレかよ……」

「相手はなかなかやるようですね。……シンヤ、ここは『紅き翼』
というギルドに協力要請をしてみては？何かしらの情報を持っている
かも知れませんか、どちらにせよ損は無いでしょう。」

「そうだな……じゃあまずは何処にいるのか調べるとするか」

二人ともまだ少年、少女と呼ばれるような年頃に見える。

少年の方は、少女に見間違えるような容姿で肌の色は白、気の強そ
うな目は右が銀、左が真紅になっていた。銀の髪はとても長く、下
手をすれば、少年の身長の高さの五倍の長さがあり、腰の辺りで何度も折
り返している。

腰にさしている二本づつの刀と鞘は片方は聖剣、片方は魔剣といっ
た感じだ。

少女もまた中性的な顔立ちで緑色の瞳で、黄金の髪は後頭部でまと
められている。

手には黄金の剣を持っていた。

少年は衛宮神弥 えみやしんや

真名は神凪森羅 かんなぎしんら

真祖の吸血鬼だ。

少女はセイバー

真名はアルトリア・ペンドラゴン

イングランドの英雄、アーサー王だ。

サーヴァントとマスターの主従。森羅が座から無理矢理セイバーを呼び出し、不安定なセイバーを人形に写した結果である。

「完全なる世界か……なにを企んでんのか知らねえが……世界から警告が来る程だからろくでもねエことはたしかだ。ま、おかげでセイバーを召喚できちまったんだけど。まあいいや。帰っぞ、セイバー。」

森羅は少し微妙な顔をしたが、すぐに元に戻った。

「はい。……しかしシンヤ、貴方は剣の形が多く混ざっていて、少し雑すぎる。鍛練が足りないのでは無いですか？」

「あゝここ数百年魔法の鍛練ばかりしてたかなあ……セイバー暫く付き合ってくれるか？」

「わかりました。ですが、その前にご飯を頂けますか？」

その言葉に森羅は苦笑し、

「わあってんよ。んじゃ、とつと帰って飯にすつか。」

主従は去っていく。もはやなにも無い場所を背にして……

sideナギ

「んっふっふっ。こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じや、早速肉をっっ」

俺はどんどん肉を入れていく。

「あっ！ナギおま…！何肉を先に入れてるんだよ！！」

「トカゲ肉でも旨いかのう？」

「いいじゃねえか。旨いもんから先でよ、ホラホラ！」

何か詠春が騒いでいる。

が、俺は無視をして、肉をどんどん鍋に入れる。

「バツ、バカ！火の通る時間差というものがあってだな……まずは野菜を入れて……あーちょッ！」

「あーうっせ！うっせーぞ、えーしゅん！」

本当にうるさい……俺は肉が食べてえんだ！

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』……と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーグン！？」

「っ…強そうじゃな」

將軍って強いやつだよな！

「わかったよ…詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

「（鍋奉行じゃ…？）んー…嬉しくないなー」

「そうですか？いいじゃありませんか。鍋將軍」

！？

何時から此所にいたんだ！？

接近に全く気付かなかった！！

「誰だ！？テメエ！？」

改めて見ると目の前の女が異質だと解る。膨大な魔力を持っているのここに接近される迄気付かなかった。ということは魔力の隠し方が上手いのか？しかも見た目まだ十六くらいだと？

「私はセイバーです。貴方方が紅き翼で間違いありませんね？」

「だったらどうする？ここで俺達とやるのか？」

「いえ、そのつもりはありません。私達は貴方方に手伝って欲しいのです」

「そんなことが信じられるとでも？」

「待て、アル。…話してみろ」

アルが殺気立てて聞くが俺は止めてまずは話しを試みようと思ったからそう言った。

「助かります。では食事をしながら話しましょう」

そう言って再び鍋を囲んだ。

説明中……………

「なるほど……『完全なる世界』ってのが世界に影響を与えて危険だから力と情報が欲しいと……いいぜ！この戦争が終わったらな」

「いえ、この戦争にその『完全なる世界』が絡んでいる確率が高いのです。ですので私達もご同行させてもらえないかと……」

ん？なんだ？

空から剣が飛んできて鍋にぶつかった。

ほとんどがいつの間になくなっていたから、中身が飛び散ることは無かった。

「食事中失礼……ッ！！」

俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！
いっちょやろうぜッ！」

なんだあの筋肉ダルマは？

「何じゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな…
えいしゅ…むおー？」

詠春が鍋を頭から被っていて、セイバーって奴は何か下向いてブツ
ブツ言っているやがる…
完全にキレてんな。

「フ…フフフフ…フ…食べ物で粗末にする者は……」

うわっ全く同じタイミングで同じ言葉言っているやがる。

こうゆーのなんてったけ？異国同音だっけ？ま、いいや。

「どーしたー！来ねーのかあー！来ねーならこっちから……」

ザンツ！！

「おほ」

「斬る」

詠春が斬りかかる。

あれ？セイバーはどうしたんだ？

「ハアアアアツ！！」

ドガンツツ！！

セイバーも見えない何かで攻撃していた。
にしてもあれかなりの威力だ。

暫く見てると詠春がヤバそうだったから戦いにはいる事にした。

「おう。出たな情報その4、赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、無敵」

「てめえら、手エ出すなよ!!」

「むう……仕方ありませんね……」

セイバーも空気を読んで引いてくれた。
よし!やるか!!

第3話 世界の敵と紅き翼（後書き）

後書きコーナー

神「遅いわーーーー!!」

作「ギヤアアア……………うつすんません。」

神「何でこんなに遅くなったんや?」

作「じ、実は全くネタが出なくて……………」

神「本当か?」

作「……………すみません、他の方の作品見てたらこうなりました、はい」

神「……………はあ」

作「え?それだけ?」

神「串刺しになりたいのか?」

作「遠慮しときます」

神「まったくそういやサブタイ付けるようにしたんだな」

作「ああ。付けといたほうがいいかなあ〜と思って?」

神「何故に疑問形?とにかく今回はここでさよならだ。またな」

第4話 紅き翼と神弥の出逢い（前書き）

ぬあああ

ダ
ル
イ
イ
イ

更新が遅れて申し訳ありません。

第4話 紅き翼と神弥の出違い

セイバーが新たに入り、暫くの間戦闘を繰り返し、ラカンも入った。その後、白髪の青年に嵌められ、連合・帝国に追われることになった紅き翼。

さらにその後、オスティアの姫、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアが幽閉されている【夜の迷宮】から助けだし、紅き翼は隠れ家に移動した。

「何だ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ？このジャリはよ」

「何だ貴様無礼であろう！」

「へっへっん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「その辺にしておきなさいラカン。初めまして。セイバーとお呼びください」

ヘラスの第三皇女、テオドラ・バシレイアヘラス・デ・ヴェスペリスジミアといい争うラカンまるでどちらも子供である。そしてその二人を止めるセイバー。

そして、ナギたちと話しているアリカ姫。

「さーて 姫さん。 助けてやったはいいけど、こっからは大変だ

ぜ。

連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です、王女殿下。

殿下のオスティアも似たような状況で……最新の調査でさオスティアの上層部が最も黒い……という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか……我が騎士よ」

「だからその我が騎士って何だよ、姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主は最早私のものじゃ」

「な……」

「連合に帝国……そして我がオスティア。

世界全てが我らの敵という訳じゃな。

じゃが……主と主の【紅き翼】は無敵なのじゃろ？

世界全てが敵——良いではないか。

こちらの兵はたったの8人……だが最強の8人じゃ。なれば我らが世界を救おう。

我が騎士ナギよ。我が盾となり剣となれ」

「……やれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

ナギはアリカ姫の前で膝を付き、アリカ姫はナギの肩に剣を置く。ここに誓いは完了した。

「誰だ!？」

ナギが突如気配を感じ、アリカ姫を背に庇い、他の者は戦闘体制に構えた。……セイバーを除いて。

「やつと来ましたか、マスター」

「まあ、な。いろいろあったんだよ。いろいろ」

セイバーが気配がする方に言うと、そこから一人の人物が現れた。

「!!……貴方は確か、『永遠の恋人』、『最悪の吸血鬼共』の片割れでは？」

「ああ、確かにそんな二つ名がついていたな。」

もうセイバーから聞いているとは思うが、今回の戦争の終結の為に力を貸して貰いたい」

「……まさかセイバーさんの契約者があなただったとは」

「なあアル、『永遠の恋人』って何だ？」

「知らないのですか？ 闇の福音と共に恐れられた吸血鬼です。賞金8000万\$の賞金首です」

「なっ! マジでか!」

現れたのはセイバーのマスターで、吸血鬼真祖の衛宮神弥だった。

「ああマジだ。」

それで、俺も仲間に入れてくれないか？」

「……いいぜ。衛宮、お前も今日から紅き翼の一員だ」

「ちよっ、ナギ、そんな簡単に決めて良いのか？」

「大丈夫だろ。」

セイバーもいいやつだしよ」

「お前がそう言うならしょうがない、な。よろしく頼む」

「ああ。それと、衛宮は止めてくれるか？」

神弥と呼んでくれ」

「わかったぜ。神弥」

こうして紅き翼に、間違いなく最強のメンバーが集まった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「よし、お前！俺と一回やり合おうぜ」

「ん？別にいいぞ」

「あ！俺も混ぜてくれ！」

ラカンが神弥に勝負を申し込み、それにナギが加わる。

「本当に二対一で良いのか？」

「ああ。伊達に最強種やって長生きしてねえよ。

ルールは俺に一回一回攻撃を当てる。これがお前達の勝利条件だ。
敗北条件はお前達の戦闘不能。

……来るなら全力でこい。人間最強とやらの意地を見せてみる。

俺は今回、力押しはしないで技術だけで勝ってやるよ」

「へっ後悔すんなよ……行くぜ！！」

side 神弥

まずはラカンが突っ込んで来た。

「うおりやアアア」

「はっ……トレース・オン 投影開始」

俺はラカンの拳を避けながら干将莫那を投影して、捌く。気で強化しているようだが、干将莫那はランクが低くても宝具なので、簡単には防げないはずだが、あまり効いていない。
流石はバグキャラと言われるだけはある。

それでも暫くすれば通り始めたのでラカンは後退していった。

「百重千重と 重なりて 走れよ稲妻」

ちっ少し強いのが来そうだ。盾を出すか？

トレース・オン
「投影開始」

「千の雷ッ！！」

「雷切ッ！！複重投影ッ！！」

俺は雷を文字通り切る剣を複数投影し、当たるのを避けた。

複重投影は一本剣を出して更に同じものを半分の魔力と半分の行程で投影する技術だ。

「オラアアアアアッ！！」

今度はラカンが剣を大量に投げってくる。
俺は自分に当たる剣だけ弾いていく。

「そら、今度はこっちの番だ。上手く避けるや。
工程完了。全投影待機。（ロールアウト。バレットクリア）」

俺は剣を視界いっぱいになる程に投影する。

この大量の剣は神剣、魔剣、聖剣、名剣、妖刀、などだ。
一つ一つに大量の魔力が込もっている。

流星にあの二人も顔を青くしている。

やるな。普通の奴は魔力に当てられて倒れるのに。

「死ぬなよ?」

一応忠告しておく。

「凍結、解除。全投影連続層写ッ!!（フリーズアウト。ソードバ
レルフルオープンッッ!!）」

ドオオオオン!!!!!!

最早人に認識出来ない速さで飛んでいく剣の軍勢。

ナギとラカンは無事か?

土埃が暫く漂ったが邪魔くさいんで、吹き飛ばした。
すると中から気絶した二人が現れた。

「俺の勝ちだぜ」

第4話 紅き翼と神弥の出逢い（後書き）

後書きコーナー

作「ダルイので後書きコーナーお休みしますしゅーりょー」

神「まてまてまてエエエエエー！何やってんだアアアアアアアー！！」

作「何って後書きコーナーを修了するんだけど？」

神「ちゃんとやれエエエ！つたかどうかしたんだよ一体」

作「理由を言うのも面倒とゆー訳でしゅ」

神「チエストオオオオー！！」

作「べらぼうー！？」

神「何だよその悲鳴はよ？失礼にならないように説明しな！」

作「えええー」

神「早くしろ！何回叫ばせる気だ！？」

作「ハイハイわかりましたよ。作者はこの春高校に入ったんだけど、慣れなくて帰ってきてすぐに睡眠……という感じで過ごしていたので、ほとんど書けませんでした本当にすいませんでした。………これでもいい？」

神「ああ。」

作「んじゃ疲れているのでこのへんで。もしかしたら次回は日曜日に投稿できるかもしれません。サヨウナラー」

PV十万、ユニーク二万アクセス突破記念……とお願い。

神「今回のアクセス記念は作者に英語力が無いのでここから下にある文を英訳してください。お願いがいたします。」

この体は終着点。

血潮は武器で、心は知識。

幾たびの経過を越えて不敗。

ただ一度も挫折はなく、

ただ一度もたどり着くことはない。

彼ものは常に一人。

たどり着くことない終着を目指す。

故に生涯に意味は無く、

その体は【無限の武器と知識の終着点】。

神「PV十万アクセスユニーク二万突破、」

作「読者の方々、このような駄文を読んで下さって、」

神・作「ありがとうございます!!」

作「まさかここまでいくとは……」

神「まったくだ。というかもう少し早く更新しろっつーの」

作「すみません……いろいろ大変なんです」

神「ま、いい。で、上のはどういうことだ？」

作「あいきゃんのつといんぐりっしゅなので、誰かに教えてもらおうかと……」

神「他人任せかよオオオオ!!自分で調べろやアアアアアア
!!!!!!!!!!」

作「ちよっ、それエクスカリバー!!ってかこんな事前にもあったよねえええ!!?」

神「歯あくいしばれ！！『約束されし勝利の剣！！！！』」
エクスカリバー

作「いいいやああああ！！」

神「では作者がいなくなってしまったので改めまして、

PV十万アクセスユニーク二万突破ありがとうございます！！
それから、固有結界の詠唱の英訳、お願いします！」

作「じ……次回……固有……結界を……使う……予定で……ですが、自分、
は長く……更新を開け……ないよう……にしたい……の……で、暫くして
も……来な……い場……合は固有結界……無しで進め……ます。ガクッ」

神「サヨウナラー」（↑いろんな意味で）

PV十万、ユニーク二万アクセス突破記念……とお願い。（後書き）

一週間後に次話投稿します。

第5話 完全なる世界と最終決戦（前書き）

固有結界の詠唱の英訳は月詩様の方を使わせて頂きました。 f a u
s t 0 3 2 7 様申しわけありません。

第5話 完全なる世界と最終決戦

あの後やった事は紅き翼に入る前から神弥一人でやっていた、敵の調査に拠点潰しと、入る前からあまり変わらなかったが、人数がいる分だけ早く型が着いた。

あれから意外と早く、完全なる世界の本拠地を突き止めた。

そこは……世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部【墓守り人の宮殿】。

そして……この戦争の最終決戦の時が来た。

side 神弥

「不気味なぐらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

墓守り人の宮殿付近に来た俺たちは、様子を見ている。

しかし……ナギと一緒にいてもいいが、外の戦力が思ったより少ない。

さて、どうするか……

「ナギ、悪いが、戦力が思ったより少ないから俺達は外で戦うがままわねえか？中はお前等だけで十分だろ？」

「へっ、当たり前だ！」

「よし。なら……任せたぜ」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」
「おう」

準備完了したのか……
んじゃ、この戦争最後の開戦だな。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや俺達が本丸に突入出来る。頼んだぜ！」

「ハッ！」

「おいおいなあに言ってるんだよナギ。俺とセイバーもいるんだぜ？大丈夫に決まってるんだろ」

「私も、死力を尽くしましょう」

「へっわかってるよ」

さて、と。こいつらの為に、そして開戦の花火といこおじゃあねえか！

「うつし！道を作ってやる。
暫く時間をくれ」

そう言って目を瞑り、集中する。
そして準備ができたところでガトウという奴から連絡が来た。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。
帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう……決戦を遅らせることはできないか？」

無理だ。もう攻撃する準備は整った。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはすでもう始めています……」

『世界を無に帰す儀式』を。

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

できればあの子も救ってあげたい、かな？

「投影・開始」
トレス・オン

俺は、前の世界の仲間、アスベル・ラントが使っていた武器、エクスカリバーを投影する。

エクスカリバーと銘がついているが、アーサー王であるセイバーの剣とは違うが、特別な元素^{エレス}が使われていて、なかなか威力が期待できる。

それに今使う秘奥技はアスベルの物だ。ならばこの剣はうってつけだろう。

「終わらせてやる！！」

まずは剣を納めた状態で敵の群れに突っ込む。

「全ての因縁と………」

敵に近づき、剣が納めてある鞘で横殴りにする。すると、衝撃波で、多くの敵が吹き飛んだ。

「全ての運命に！！」

さらに上向きに蹴りつけると、直線上の敵が宙に浮いた。

「ケリをつけるぞ!!」

何もないその直線走りながら切りつける。

「斬空刃！無塵衝オオ!!」

縦横無尽に切りつけた敵はほとんど細切れになり、内部までの道に敵はいなくなった。

「行けッ！ナギッ!!」

「おう！よおしつ、野郎ども……行くぜッ!」

- - - - -

……よし。行ったようだな。

これで遠慮無くあれができる。

あれを使えばすぐに外は制圧できるだろう。

「セイバー」

「なんですか？シンヤ」

「あれを使う」

「!!……いいのですか？」

「ああ。時間稼ぎを頼む」

「わかりました。貴方が決めたのなら、私はそれに従いましょう」

「セラス嬢！

済まないが混成部隊を少し下げて貰いたい！

大きいのをだす！」

「りよ、了解しました！全員後退！」

混成部隊が退避しだし、それを狙う敵がいるが、

時折約束された勝利の剣エクスカリバーを使うセイバーによって駆逐されていく。

今思うと反則だよな。あれ。

こんなのをなんつつたけな……ま、いいか。

「特とご覧あれ。

これから貴様等が見るは、魔術の到達点だ！！」

詠唱を始める。

「This body is a last point .

（この体は終着点。）

Blood is arms , and the mind i
s knowledge .

（血潮は武器で、心は知識。）

Many times passage is excee
d and no defeats .

（幾たびの経過を越えて不敗。）

However , the failure is not ,
and never : .

(ただ一度も挫折はなく、)

However, you can never reach it at last.

(ただ一度もたどり着くことはない。)

It is one of them always.

(彼ものは常に一人。)

)

It aims at reaching at last but last.

(たどり着くことない終着を目指す。)

Therefore, the meaning is not, and: through life.

(故に生涯に意味は無く、)

The body is 【last point of infinite arms and knowledge】

(その体は【無限の武器と知識の終着点】。)

┌

炎の境界線が広がっていく。

外界から断たれた世界。

固有結界【無限の武器と知識の終着点】。

自身の心象風景を世界に書き換える魔法に近い魔術だ。

衛宮士郎は剣の丘。

俺はさらに近代武器や、本に埋め尽くされた図書館、墓地のある協会がある。

「行くぞ。仲間の数は足りてるか？」

俺が右手を挙げると武器が、左手を挙げると本が浮かび上がる。
今回は協会は使わない。

そして両手を同時に振り下ろした。

剣は、本は、魔法、魔術がとびかわせ、敵を焼き、凍らせ、細切れにし、突き刺し、切りつけ、存在までも消し飛ばし、消滅させた。

固有結界が解除されると、敵は残っていなかった。

- - - - -

そして戦争は終わりを告げた。

この戦いの死者はゼクト一人。

完全なる世界との最終決戦の後、紅き翼は英雄と称えられた。

そして……

オスティアが堕ち、アリカ姫と俺が完全なる世界の黒幕だと言われ、
姫さんは投獄された。

第5話 完全なる世界と最終決戦（後書き）

後書きコーナー！

作「まずはお礼を月詩様、faust0327様、藤村紫炎様感想、依頼をありがとうございます！」

神「自分からお礼を。ありがとうございます」

作「なんとか終らせた……」

神「なんだ。今回そんな大変だったのか？」

作「いや、たしかにそうだが、それ以上に大変だったのは、今日わざわざ車で一時間のところに住んでる親戚に入学祝いのお礼を届けに母親の車で一緒に行ったんだが……」

神「ほう。そう言えば高校生になったばかりだったな」

作「ああ。んで行ったんだが、俺ほとんど何もしないで母親と親戚が喋っているのを聞いているだけだった。あと豆知識で聞くと聴くの違いは自然に耳に入ってくるのと集中して耳に入れるとの違いだそうだ」

神「ああ。よくある最近知ったことを言いたくなるってやつか。高校の授業でも教師が誰かが言ってたんだろ？」

作「ぐはっ……な、なぜピンポイントでわかる！？」

神「俺を作って動かしてをのはお前じゃねえか」

作「うっそこを突かれると痛い……で、ではこの辺で。サヨウナラ」

神「あ！逃げた……今回から次回のサブタイトルが決まっていたら次回予告します。

次回！『紅き翼と救出と賞金廃止』

見てください」

作「次回予告したら内容ばれしないかな……」

第6話 紅き翼と救出と賞金廃止（前書き）

遅れて申し訳ありません。

やっと落ち着いた。

ゴールドデンウィーク、風邪で過ごしました。

チクシヨオオオオ！！

（注、作者は風邪で少し頭が悪くなっています。
ただでさえ悪い頭がさらに悪く。

第6話 紅き翼と救出と賞金廃止

sideセイバー

全くあの元老院の者は……

世界を救ったシンラを罪人等と……

そもそも人間ではないからといって、その者が外道とは限りません。因みに現在、シンラは賞金がさらに上がってハンターが増えたとかで、別行動です。

「どうするのですか、ナギ？」

「……」

「まだ2年あります。ですが逆に言えば2年しか無いのですよ？」

「それまでに方法を考える。だから、待っていてくれ」

「……わかりました」

「サンキュ。それで、森羅はどうすんだ？」

「マスターはエヴァンジェリンに会いに行きました。何か考えがあるでしょう」

「…そうか」

「では考えがまとまったら言っして下さい」

「ああ」

2年後、処刑場

「これよりかの災厄の魔女アリカの処刑を始める！！
さあ、災厄の魔女よ！自ら歩いて穴に落ちろ！」

私たちは処刑場のすぐ近くで期を伺っています。
ナギは公的にアリカを死亡させ、生きさせる為にこの時を待っていました。

そして今日はアリカの処刑の日です。

兵士がアリカに矛を突き付け、催促しています。

アリカが奈落に落ち、世界放送が終了しました。
作戦開始です。

ドゴオオオオオ！！

「な、なんだ！？」

「全く。世界を救う結論を下した英雄を自分の都合で犯罪者扱い…
…堕ちるところまで堕ちたな、元老院」

「いえ、最初からあの者共は堕ちてますよ」

「まったく、崖の下は魔力も気も使えんのだぞ。本当に無茶苦茶だ」

「ヤツなら何とかするだろう。……力づくでな」
「ぬふふふ。ニクイ演出だねえ。ナギのヤツ」

最初から、私、アルビレオ、エイシュン、ガトウ、ラカンです。

「なつ、貴様らは『紅き翼』！な、何故ここに！」

「決まっているでしょう。騎士が姫を助けに来たのですよ。彼女の騎士はナギですから」

「ふ、だがいくら貴様らが最強といっても此方の戦力に勝るはずがなかるうー！」

「あゝ？そっちの戦力そんだけかよ。しょっぱいね」

ラカンが相手を見下したように言います。

「な、なんだと！？」

「俺たち相手にそんだけで足りると思ってるのかあ？ああ？」

「ひつ、ひいいー！」

あの後無事アリカを助け、私たちは現在、日本の京都にいます。
ひとしきり観光をしました。……ハッ橋が美味しかったです。
あとは寝るだけとなったのですが……

リヨウメンスクナノカミなどという鬼が出て私達が迎撃することに

なりました。

無事封印したあと、最後に京都の隠れ家へ行き、写真をとりました。
……シンラがないのが残念です。

未だにシンラから連絡はありません。
私はどうすればいいのでしょうか？

- - - - -

side 神弥（森羅）

やっとエヴァを見つけた。

……しかし何故そこにナギがいるのだろう？ まあいい。

「ここにいたか、エヴァ。」

「つてかなんでナギまでいるんだ？」

「っ！？ し、森羅？ 森羅なのか！？」

「お！ 久しぶりだな森羅」

エヴァは驚いて、ナギは予想どおりの反応をした。

「おう。約束からちょうど三百年だ。」

だから合流しようと思ってきたんだ」

「そ、そうか……………う、あ…………森羅…………しんらあああああ
あ」

その後エヴァはナギがいることを思い出すまで泣いていた。
約一時間。

side / out

- - - - -

「いやあゝ闇の福音がこんなガキでしかも大泣きするとはなあゝ」

「う、うるさいぞ貴様！！」

少し黙れ！そして忘れる！」

「アハハハハッ！やーだね！！」

「き、貴様ア！！」

エヴァが怒鳴り、ナギがそれを逆撫でし、さらにエヴァが怒鳴る。
そしてそれを我関せずとしている森羅。

そんな空間が形成され、戦闘体制になっていた。

「今日という今日こそ貴様に勝つてやる！！」

「アッハッハッハ！

できるもんならやってみな！！」

エヴァがナギといたのは大戦に出ていた森羅の情報を得る為にナギ
につきまとっていた。

そしてエヴァが攻めようとナギに近づいた時、

「ッ！？なつ何ッ！？」

「アーハッハッ！！」

こんな簡単に引ッ掛かるとはな！！」

「落トシ穴ダ御主人」

「そんな事見ればわかるわー！」

「どうしたんだ、エヴァ？鈍ったか？

修行やり直しかな？」

「！！！！！？そ、それだけはやめてッ！！」

「めっちゃ怯えてるじゃねえか。

何やったんだ？」

森羅は暫く考える素振りを見せた。

「別に変な事をして無いんだがなあ……

それよりいい事考えたんだけどよお」

「お？何だ？」

「それより早くここから出せー！！

二、ニンニクとネギ！？」

エヴァを無視して喋り続ける森羅とナギ。

「なるほどそりゃあ面白そうだな」

「だろう？」

二人はイタズラを思い付いたような顔をした。

「おっおい、何だ、その顔は？」

「まあいいからいいから。よつと」

ザブン！

森羅はエヴァの落ちた穴に飛び込んだ。

「じゃ、いくぜ」

「頼むぞめんどくさがらずちゃんとやれよ」

「マンマンテロテロ……」「ちよっおい！何をするんだサウザンドマスター！！森羅！！」

（略）

登校地獄！！」

「う、うわああああああああ」

「あっはっはっはっは」

闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。
世界の敵、衛宮神弥（神凪森羅）。

永遠の恋人、最悪の吸血鬼と呼ばれた二人は麻帆良学園に封印された。

第6話 紅き翼と救出と賞金廃止（後書き）

後書きコーナー

前半時

作「ゴホツゴホツヂグジョー風邪がヒデエ」

神「おいおい近寄るなよ、うつったらどうすんだよ」

作「悪い。とりあえず今日はこのへんで」

神「このまま投稿しちまえば？」

作「いや、そうすると、お前、名前だけの登場になる、けど？」

神「じゃあいま書け」

作「いやいやいやいや、無理」

後半時

神「復活したか」

作「まあな。前半確認しないで出しちゃったけどな」

神「おい」

作「まあまあ」

神「はあ……後書きコーナーまで分ける必用あったのか？」

作「一応な。つか、ゴールデンウィーク風邪だよ？最悪だよ……」

神「どうせ行くところ無かった癖に」

作「そうなんだけどさあ」

神「で、次回は？」

作「原作開始になるな。ちなみに暫くセイバーは出します。

次回、英雄の息子と吸血鬼です」

神「また次回、よろしくお願いいたします」

第7話 英雄の息子と吸血鬼（前書き）

遅れて申し訳ありません。

第7話 英雄の息子と吸血鬼

side 神弥

「学園長先生、このガキが先生っていったいどういうことですか！？」

現在、学園長室で学園の生徒、神楽坂明日菜が爺（ぬらりひょんとも呼ぶ）に赤毛の子供を抱えて怒鳴り込んで来た。
何故にこうなったかというところ……

- - - - -

あれからもう15年たった。

最初の三年間は、俺達は中学生として過ごしてきた。

しかし、ナギがいつになっても呪いを解きに来ないから、俺が勝手に解呪した。方法？膨大な魔力をぶちこんだただけだけど、何か問題でも？

あー、1つだけあったな。魔法先生とかが難癖つけて来たつけ。爺に言っただけで黙らせただけな。

それと、タカミチは俺とエヴァに弟子入りしてきた。調子に乗って鉄甲作用を教えたら、使いこなせるようになったので、黒鍵を渡した。

まあその後高校、大学に行った。

……さすがに二人共容姿がミスマッチだったから、年齢偽称薬は必須だった。今度半永久的に肉体年齢を上げる術式を作ろう。大学を卒業した後、どうしようか悩んでいると、爺に先生をやらないかと言われた。

面白そうだから了承したんだが……何故に女子中何だ？ まあ、まずそもそも爺の学園長室が此処つつうのもおかしい。まあ、細かい事はどうでもいい。

何か随分脱線したな……。

それで今年で先生になって五年。

なんでも、あのナギの息子が先生として修行に来たらしい。そいつがいま神楽坂が掴んでいる坊主だ。

- - - - -

「あ、衛宮先生やん。どうしたん？」

「衛宮先生！先生からも何か言って下さいよ！」

それを俺に言ってもどうすることもできねえよ

「まあまあ明日菜ちゃんや、とりあえずは教育実習ということになるじやろう。」

今日から三ヶ月。頑張りなさい」

日本の労働法はどうなったのだろうか？

「ところでネギ君は彼女はおるのか？どうじゃな、ワシの孫娘のこ
のかなぞ」

「ややわじいちゃん」

近衛が爺に金づちで殴り、爺の頭から血が吹き出している。汚い。

「ともかく、担任がネギ君。副担任に衛宮君が入ってもらおう」

「おい爺、聞いてないぞ」

「聞けよ爺」

俺は爺の頭を机にめり込ませた。

！？失敗した……汚いものがついちまった。

「あ、あの、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

「あ、ああ。俺は衛宮神弥だ。よろしく」

こいつがナギの息子か？全然似てねえ。

結局その後、チャイムになり、なし崩し的になった。
現在、教室前だ。

ガラッ

「失礼しま……」

入った時、ネギ坊主が黒板消しのトラップにかかり、それを障壁で受け止めた。

……切つとけよ。

神楽坂が凝視するのを見て、思わず口に出そうになった。
先程、思ったことを訂正しよう。

やっぱナギに似て馬鹿だこいつ。

第7話 英雄の息子と吸血鬼（後書き）

後書きコーナーはやめました。
やった方がいいですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3609k/>

複写眼は世界を渡る

2010年10月10日19時32分発行